

ガネフォ以来のお付き合い

村上(本郷)順三 (74歳)
(成城大学出身)

ガネフォへの出発前、私は菅久キャプテンを含め12名の日本水球チームが、一致団結してガネフォに出場する事が出来るように、選手としての水球練習の他に世話役として連絡や通知に時間と神経を費やした。何しろ会社の仕事が終ってからメンバーへの通知・連絡を行わねばならないため、身体が2つあっても足りないぐらい出発前は大変忙しい日々を過ごした。

いよいよ、インドネシアに向かうため飛行機に搭乗したのですが、飛行機の狭い座席で長時間座りっぱなしと言う過酷な状況が続きました。出発前の忙しい日々で疲れている事や、狭い座席で長時間座りっぱなしと言う状況が無かつたとすれば、多分「いぼ痔」を患っていたのではないかと思うと、ガネフォの思い出としては「いぼ痔」の話を持ち出さざるを得ないです。下(しも)の話で申し訳ありませんがご容赦下さい。

昭和38年(1963年)11月2日、羽田国際空港から飛び立ったガルーダ、インドネシア航空のガネフォ選手団専用機の中で、初めて「いぼ痔」(ここから先は「いぼ痔」を「G」と表現します)と言う病気が我が身に発生しました。思えばそれ以来、50年(半世紀)の長きに渡り「G」とお付き合いしており、今では発生当時より小さくなっているものの、「G」が、私の身体からから消えて無くなつた事はありません。

実は、私がこの世に生まれてインドネシアに出発する24歳までは、「G」という病気との係わりは一切ありませんでした。

幼稚園から小・中・高校、そして大学・社会人になってガネフォへ行くまでは、「G」という病気にかかったことは一度もありませんし、そんな病氣があることもよく知りませんでした。

ところが、インドネシアのジャカルタに着いてから、初めて「G」という病気との係わりが始まる事になるのです。それ以来、現在までズ~と長きにわたりお付き合いを続けております。振返れば長かった50年でもあり、アッという間の50年でもありました。

なぜ、ジャカルタに着いてから「G」とのお付き合いが始まったのかを振り返ってみると、上記で申し述べた通りガネフォ出発前は、日本水球チームの選手としての練習の他に、メンバーに情報の伝達やスケジュールの報告、そして脱退届を出すための相談や事務手続き、海外へ出発するための準備、その他

いろいろな事務連絡など、何かと出発までの関連業務があり、東京以外に住んでいる人達にもきちんと正確に連絡して、手違いの無いようにしなければならないため、心身ともに疲れていたのです。その上、この時代では珍しいとされていた海外旅行（海外遠征）に行くという事で、京都の実家から母と姉が東京まで見送りに来てくれるため、久しぶりに東京見物にも連れて行かねばならなくなり、毎日忙しい日々を送っていました。

いよいよ出発日となり、わざわざ京都から駆け付けてくれた母と姉が、また成城の下宿からは酒井アパートのおばさんや四国の高橋さん（私の部屋の前）達が、羽田国際空港まで見送りに来てくれました。

皆さんに手を振って別れを告げて、インドネシアのガルーダ航空の飛行機に乗込みました。あの時の飛行機は、ジェット機ではなくプロペラ機でした。座席が狭くベルトで固定されており、身動きがあまり出来ず、ガネフォの開催地ジャカルタに香港、マニラ経由で到着するまでの10数時間、ズ～と座ったままの姿勢でした。その様な状態だったのでお尻が何だかムズムズして来て、何かがお尻に挟まっているような感じになってきました。これはいつもと違うぞ！ 変だぞ！ これはまずいぞ！ と自分で感じるようになりました。

ようやくジャカルタの空港に到着し飛行機から降りると、11月で、しかも真夜中なのに熱風が吹いており、「ムー」として常夏の国だという実感をまず味わいました。考えてみればインドネシアの首都ジャカルタは、赤道直下の南半球に位置しており、11月でも真夏のように熱いのは当然のことなのです。到着時は歓迎ムードで音楽隊や舞踊団そして美しい女性達に迎えられ、とても親日ムードでしたから安心しました。

やがて宿舎に入りひと休みして、翌日からプールで練習が始まりましたが、泳いでいると何だかお尻に物が挟まっているようで、ムズムズするのです。指で触ってみると親指ぐらい

(直径2cm)のはれ物がお尻の肛門の所に出来ていました。痛くはないのですが、何だかお尻に抵抗感がありました。「これは放っておけないぞ！」との直感から、すぐに選手村の病院へ一時入院して診察してもらう事になりました。インドネシア人のお医者さんでしたが、肛門の出口にできた「いぼ痔」との診断



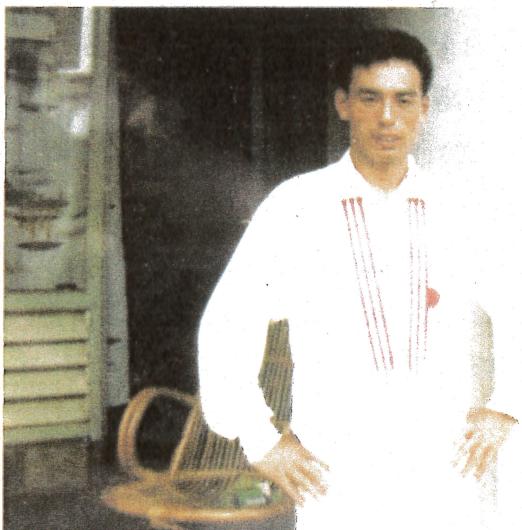
選手村の病院に1日入院

でした。

本来なら外科手術で切取ってしまえば1週間程で完治するとの事でしたが、大事な試合が目の前に迫っている為、切取ることは出来ません。そこで1日だけ入院して翌日は宿舎に戻りました。

その時の治療は「G」に薬を塗って、数分間モミモミして、お尻の肛門の中へ「G」を仕舞い込むという原始的な治療方法でした。「G」を肛門の中に仕舞い込むとお尻に物が挟まった感じは無くなります。そして、普通の状態と変わらず、水球の練習をしてもほとんど違和感は無くなりました。しかし、大便をするとその後、「G」が「プリッ」と外へ出て来て、歩くと摩擦されて何だか違和感を覚えます。そこで、飛出た時は薬を塗りながらモミモミして「G」を肛門の中へ仕舞い込む治療をインドネシアのお医者さんから教わりました。

この方法で治療をすると「G」は皮膚との摩擦が起きない為、肛門の中で徐々に小さくなり、泳いでいても違和感や抵抗感はありませんでした。



お土産の「銀メダル」

その治療方法を覚えてからは思う存分泳げるようになりました。

そして、ガネフォが終了し、インドネシアからのお土産は水球競技で獲得した「準優勝の銀メダル」の他に「Gと言う病気」と「その原始的治療方法」を持帰る事になりました。

帰国後、日本に於いても「G」の再発が度々ありましたが、手術をして切取る事はしないで、肛門の中へ仕舞い込む治療方法で対処して来ました。そして今でも「G」を友として付合い続けているのです。

今では私にとってこの「G」は健康のバロメーターとなっており、会社に勤務していた頃、夜遅く帰宅した時や大酒を飲んで帰った時は、必ず「G」が腫れ上がって「身体が無理しているよ・・・」と教えてくれます。しかし、休日になり身体が休まると「G」は小さくなつて違和感も無くなります。この様な事から今では「G」は、私の健康バロメーターとして活躍していますので、これからも末永く付合って行くしかないと思っています。